

2 伊勢街道の旧宿場町の営みに みる歴史的風致

はじめに

奈良盆地の中央部を横断する横大路は、西の河内・摂津から伊勢へ通じる重要な街道である。この横大路を慈恩寺から長谷寺（いずれも現在の桜井市）を通して東に進むと、西峠を越えて萩原^{はぎはら}に至る。萩原は、御杖に向かう伊勢本街道と名張へ向かう伊勢北街道（表街道とも呼ばれる。以下より「あお越え道」という。）の分岐点がある交通の要衝地である。萩原から香醉峠^{こうすいとうげ}を越えて北へ向かえば東山中^{ひがしさんちゅう}に至り、伊賀・山城へと通じ、萩原から南へ行けば、多武峰^{たうのみね}・吉野に至り、あらゆる方面からの人が行き交う場所であった。

中でも、交通の要衝地として萩原の発達が目覚ましく、これには長谷詣と伊勢詣の影響が大きかった。京都より伊勢神宮へ詣でるなら、近江路を経由するのが本来だが、南都巡礼・長谷詣をするため大和路を利用する者が増え、こちらが主流となる。

当時、伊勢街道には通行税を徴収するための関所が何箇所か設けられており、長谷関に続いて萩原関^{いだし}（井足の関）が置かれたが、これは皇室御領の関であった。次の関は赤埴^{あかばね}（赤埴）、諸木野^{もろきの}、黒岩と、短い区間に多くの関所が固まっているのは、それぞれの荘園領主が、経済政策のひとつとして関所を設けたのである。それだけ交通量が多かったことがうかがえる。



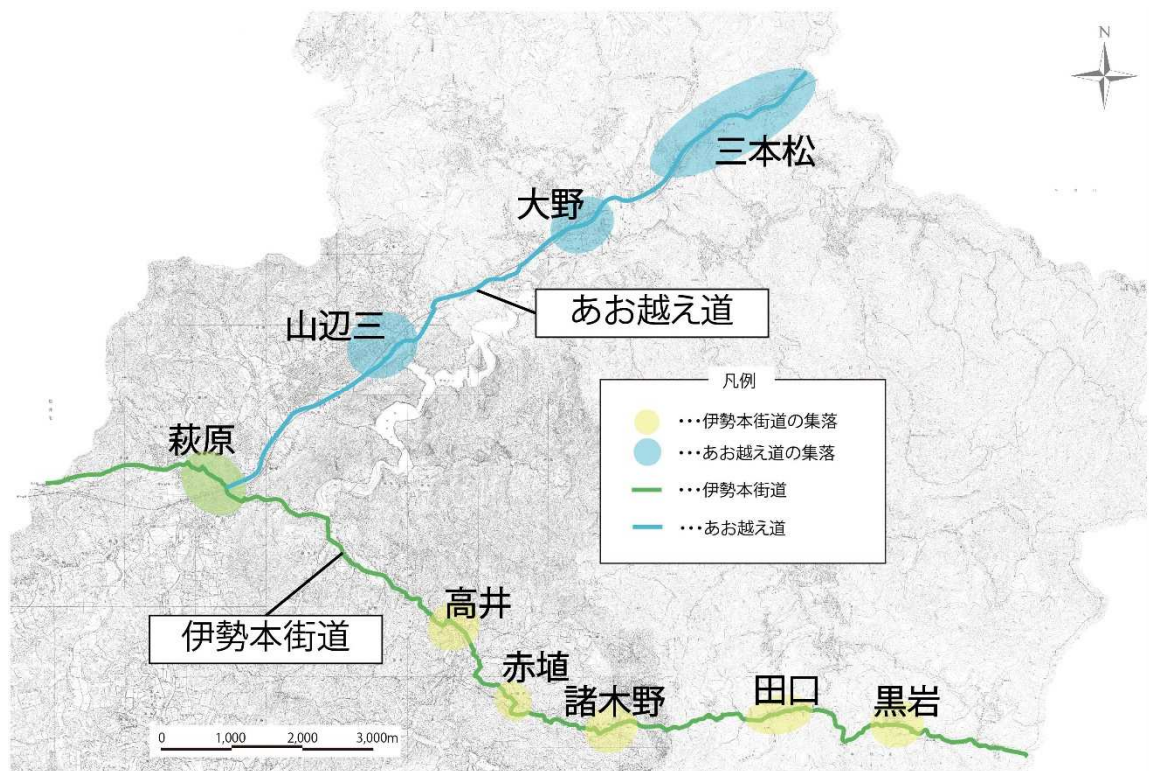
戦国時代に入って関所が廃止され、江戸時代以降は街道筋に旅籠や商家が立ち並ぶようになり、萩原、高井、赤埴、諸木野、田口など宿場町が形成された。近代に入って鉄道や自動車の普及に伴い、歩いて伊勢参詣をする人の数は大幅に減ったものの、現在でも宇陀市内には、常夜灯や道標など、伊勢街道の面影を残す道や旧宿場町が何箇所もあり、観光名所やハイキングコースとして訪れる人を迎え入れている。また、こうして訪れる人のために行う道づくりやおもてなしなど、集落で古くから続いている行事がいくつか残っている。

ここでは、伊勢街道により発展した町場や集落の面影を色濃く残す地域を舞台に繰り広げられる、地域に根差した活動について紹介する。

2-1 伊勢街道の分岐点、萩原の年中行事にまつわる歴史的風致

2-2 本街道沿いの集落の営みにみる歴史的風致

2-3 あお越え道沿いの集落の営みにみる歴史的風致



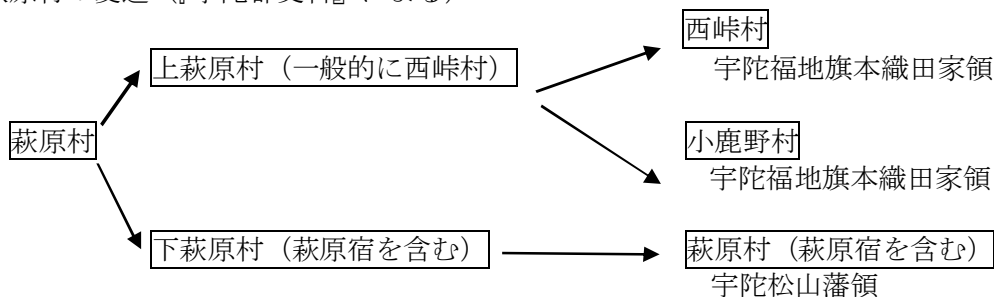
宇陀市内の伊勢街道と旧宿場町の図

2-1 伊勢街道の分岐点、萩原の 年中行事にまつわる歴史的風致 (1) はじめに

萩原^{はぎはら}は、古くはハイバラと読まれ、古地図に灰原^{はいはら}と書かれているものもある。中世の萩原庄の一部が近世のはじめに「萩原村^{はいばら}」と呼ばれたが、『宇陀郡史料』(大正6年(1917))によると寛永7年(1630)に萩原上村、萩原下村に分離したとある。明治22年(1889)に合併して榛原村、明治26年(1893)に榛原町となる。陸上交通の中心地で、伊勢本街道、あお越え道、松山往還、古市場往還の要に位置する。墨坂神社や宗祐寺、名所に鳥見山があった。

かつての様子を伝える絵図等の史料が乏しく、まちの成り立ちは不明だが、『宇陀郡史料』(大正6年(1917)/宇陀郡役所 著)によると「本村元榛原の字を用い、中古這原或は灰原、後ち(年月不詳)今の字に改む、昔時本郡玉小西村と一村たり、寛永の頃分て二村となり上榛原下萩原と云ひ(年紀不詳)改めて今の称を用ゆ。」とある。

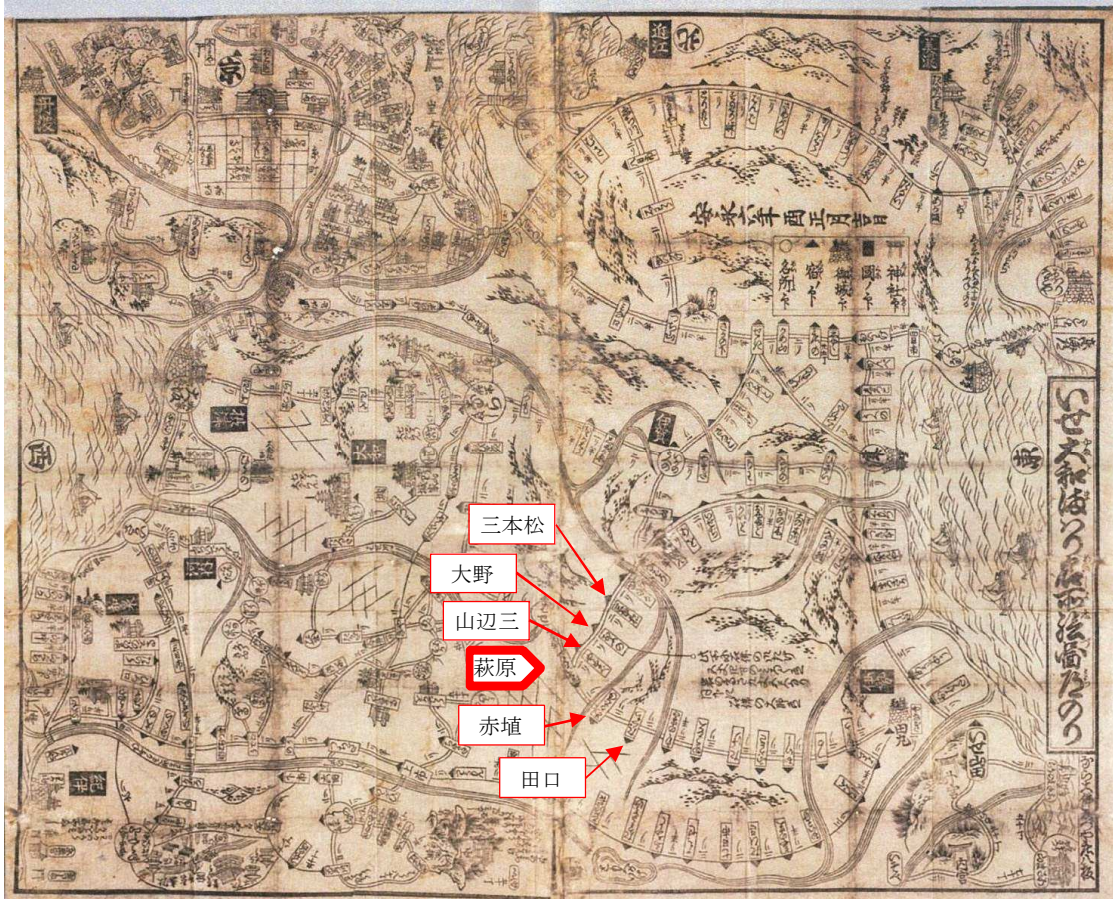
萩原村の変遷(『宇陀郡史料』による)



萩原は近世を通じて伊勢、長谷参詣者などで賑わった村方であり、特に中期以降は本街道とあお越え道との分岐点があるため、寺社詣客などで賑わった。『新撰伊勢道中細見記』(宝暦13年(1763)刊)によると、萩原については「茶や宿や多し、札の辻を左へ行バ阿保^{あお}ごへ道、すぐに行バ赤^(ね)ばにかい^{より}どう也、是方田口^{ばしやくといや}までハ馬借問屋なし」とある。萩原には、休息をとるための茶屋や宿屋が多く、馬を利用した荷物の輸送業者もあったようだ。

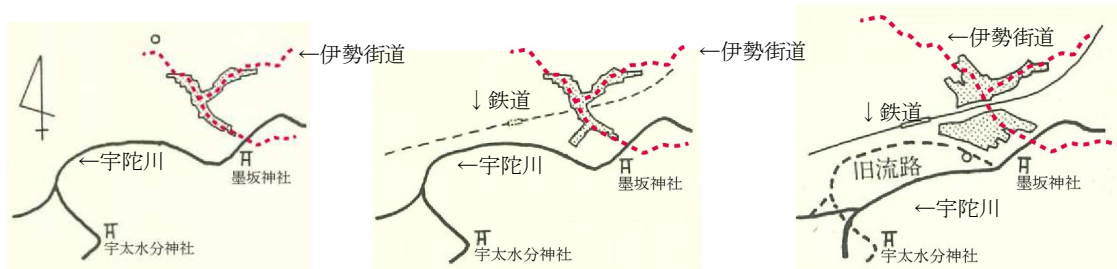
また、往来する人の利便を図るため、江戸時代中期以降、伊勢街道あるいは伊勢街道周辺の道に道標や常夜灯が建立された。萩原周辺でも、追分には「右 いせ本かい道 左 あをこ江みち」と刻まれた石の道標が、分岐点から10mほど南に、文政11年(1828)の銘がある常夜灯が残っている。

さらに、この分岐点には高札場があったことから、「札の辻」と呼ばれ、札の辻周辺には、「あぶらや」「あわや」「江戸屋」「河内屋」「いたこや」「井谷屋」「浦屋」などの旅籠が並び、萩原は宿場町として賑わっていた。



いせ大和まはり名所絵図のり（安政 6 年（1777）（奈良県図書情報館蔵）

昭和 5 年（1930）の伊勢参宮鉄道の開通や自動車の普及に伴う道路網の発達により、徒歩で伊勢詣をする人は減ったものの、年末に徒歩での初詣が続いているほか、現在では健康志向の高揚に伴い、ウォーキングや観光目的で歩く人の姿をよく見かける。萩原は、古い町家が混在する旧市街地で、伊勢街道の宿場町の雰囲気をとどめた良好な歴史的環境を持った地域である。



明治 41 年（1908）

大正 11 年（1922）

昭和 42 年（1967）

萩原の町の変遷図（榛原町史より）

(2) 建造物

【旧旅籠 あぶらや】市の指定有形文化財（建造物）

伊勢本街道とあお越え道の分岐点にある旧旅籠。木造二階建、切妻造、棧瓦葺。煙出しがある。江戸時代末期頃の建物と推定され、戸袋には龍田村の道参講一行が弘化4年（1847）に書き残した墨書が残っている。旅籠を廃業したあとも、宿場町萩原を象徴する存在の建物である。

『宿料帳』（明治40年（1907）/油屋 宇陀市教育委員会所蔵）が残っており、このころまで宿をしていたことがわかる。現在は旅籠の部分は市の歴史文化館として一般公開されている。

また、10月には融通念仏宗の総本山大念仏寺の大和御回在の休憩場所に利用されるほか、伊勢まで歩講等、参宮のために立ち寄る人々のおもてなしの場となる。

【札の辻の道標】

伊勢本街道とあお越え道との分岐点に設けた、萩原札の辻にある角柱型の道標。東面に「文政十一戊子年（1828）三月吉日」、南面に「御室御所御寄附灯籠并道教守護人初生寺」と刻まれ、仁和寺の寄進であることがわかる。

度重なる道路工事の結果、現在は安全のため道の隅に移設されたものの、道案内の役割は当時と変わらず果たしている。

【太神宮灯籠】

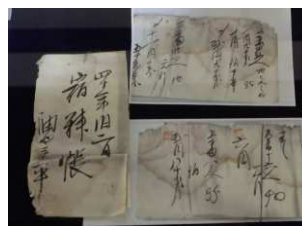
本体南面に「文政十一年（1828）」、西面に「御室御所御寄付と刻まれていることから、分岐点の道標と共に寄進された太神宮灯籠であることがわかる。札の辻から25m南の位置に据えられている。当初は常夜灯として設置され、灯明の油代は本街道沿いの旅籠等が拠出したと見られている。現在では、灯明は電球に変わり、おかげ祭や例大祭の宵宮のときに点灯している。



あぶらや外観



二階戸袋墨書



宿料帳



札の辻の道標



太神宮灯籠

(3) 活動

【宗祐寺の御回在】

札の辻から 100m 東、あお越え道に沿う高台に、融通念仏宗の寺院、宗祐寺がある。境内に文化 13 年（1816）に萩原社中の人々の手により建立された芭蕉句碑や庚申像が残る。融通念仏宗は、17 世紀以降、大念仏寺（大阪市平野区平野）を中心として、摂津・河内・大和で形成された宗派で、萩原町の住民の多くは宗祐寺の檀家である。

融通念仏宗の総本山である大念仏寺の本尊は、5 幅の『天得阿弥陀如来』の掛け軸で、これを護持して鉦^{かね}を打ち鳴らしながら檀信徒宅を回る行事を「御回在」と呼ぶ。如来さん、天得さん、ほとけさん、お上人さんなど、様々な呼称で親しまれている。

寺伝によると、「御回在」は元和 4 年（1618）第三十六世法主道^{ほっしゅどう}和^わ上人^{しょうにん}が徳川家康の寄進を辞退するかわりに念仏勧進・弘通（広範囲にわたる布教や寄附を集めて回ること）の許可を得たことが始まりとされている。現在では河内（東大阪市、八尾市、羽曳野市、富田林市、河内長野市、千早赤阪村、寝屋川市、枚方市、交野市、堺市、松原市）、大和（奈良市・大和郡山市・生駒市・桜井市・橿原市・天理市・香芝市・宇陀市・王寺町・斑鳩町・平群町・三郷町・三宅町・上牧町・河合町・広陵町・川西町・田原本町・安堵町・名張市）と近郷（大阪市内）の御回在が行われている。

大和御回在は 92 日間（3 年に 1 度の山中回りの年は 100 日間）の日程で、萩原には 10 月 15 日にまわってくる。15 軒ほどある檀家の家を順番に回り、本尊を黒塗りの桐箱から出して広げる「お掛けり」或いはお掛けりをしない勤行^{たてえこう}「立回向」を行う。

また、宗祐寺でも総本山とは別に「御回在」を行う。宗祐寺に伝わる「年中行事」（明治 42 年（1909）頃に成書されたと推定）に「近檀回在是ハ（略）」とあり、長く続けられている行事であることがわかる。現在は 6 月と 11 月に行われ、6 月は 1 日から 22 日にかけて、宇陀一円を回る。基本的に移動では車を利用するが、萩原のように檀家が近隣に分布しているところは徒歩により回っている。

朝 8 時に宗祐寺を出発し、先頭の僧が鉦を鳴ら



総本山による大和御回在の様子



本尊の到着を待つあぶらやの仏間
（写真提供：西田眞佐子 氏）

し、本尊を納めた桐箱を抱えた僧のあとにもう一人の僧が続く。

御回在を迎え入れる家では、到着予定時刻が近づくと玄関先に出て本尊と僧たちを迎え入れる。そのまま仏壇前へと案内し、「お掛かり」または「立回向」に臨む。

まちのひとが路上で僧の一行とすれ違うときは立ち止まって道をあげ合掌する様子が見られる。

次頁の図の通り、東町方面から周り、途中休憩等を入れながら、萩原一円の檀家宅を巡回する。雨天の場合は、傘をさして町の中を歩く。

伊勢街道沿いの風情がある町並みに響く鉦の音、読経の声は、萩原においては夏や冬の訪れを知らせる風物詩である。



御回在の様子

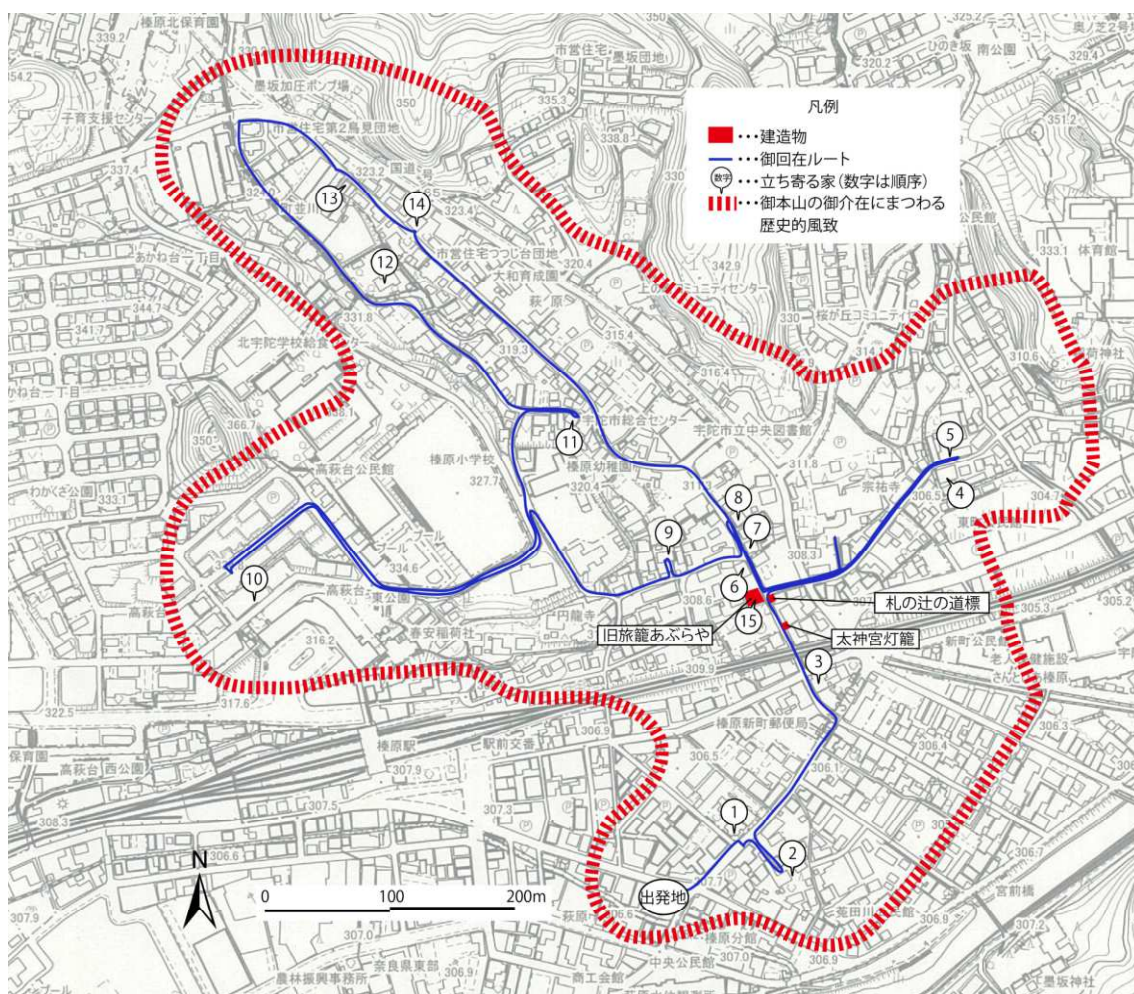


1 軒ずつ檀家宅へ上がる

(4) まとめ

古来より奈良盆地から東へ通じる交通の要衝地として栄えた萩原は、伊勢本街道とあお越え道の分岐点として、宿場町に発展した。この中心部に位置する宗祐寺は、旧市街地に檀信徒を多く抱えている。

宿場町の雰囲気を残す歴史的な町並みを舞台に、鉦の音に続いて本尊を抱えた僧の一行が行脚する光景は良好な歴史的風致を形成している。



御回在にまつわる歴史的風致

番号	名称	構造形式/年代等	番号	名称	構造形式/年代等
①	N 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑨	K 家住宅	木造二階建、陸屋根/昭和 40 年（1965）
②	T 家住宅	木造二階建、入母屋造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑩	K 家住宅	木造二階建、切妻造、S 形瓦葺/建築年代不詳
③	I 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑪	Y 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳
④	O 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑫	M 家住宅	木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺/建築年代不詳
⑤	Y 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑬	W 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建立年代不詳
⑥	I 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑭	K 家住宅	RC 造、二階建、陸屋根/建築年代不詳
⑦	I 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/昭和 47 年（1972）	⑮	あぶらや	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/江戸時代末期（推定）
⑧	O 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳			

2-2 本街道沿いの集落の営みに みる歴史的風致

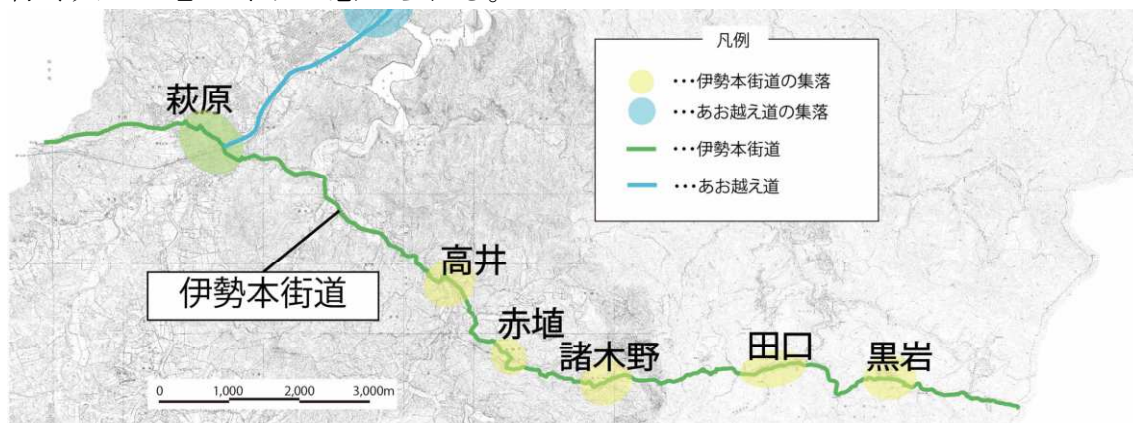
(1) はじめに

伊勢本街道は、大和国と伊勢参宮を結ぶ主街道として利用されており、飼坂峠を越え田丸を経て伊勢に入る道という。大和から伊勢への最短コースにあたるが、険しい山道が多く、旅人におそれられた。その反面、記紀などにあるように倭姫命が天照大神鎮座の地を求めての旅に関わる伝承も多いことから、『幸講定宿帖伊勢道中案内図』明和5年(1768)幸講)によると「俗説に曰く、始めて参宮する人かい坂をこゆる事、神の御心に叶ふと云う故、はせ田丸越を参り道とす」とあり、信仰の道として優先的に参宮の旅人に利用されたとみられる。

宇陀市内に残る伊勢本街道沿いの集落は、萩原^{はぎはら}を起点として西から順に、檜牧^{ひのまき}、高井^{たかい}、赤埴^{あかばね}、諸木野^{もろきの}、田口^{たぐち}、黒岩^{くろいわ}と続き、曾爾村^{そにむら}の山粕^{やまかす}へつながる。諸木野から石割峠を越えて田口へ続く道が、高低差があり難所とされている。

萩原から黒岩にかけて、旧旅籠や道標が点在しており、現在でも地道のままの場所や田畑が広がり森に囲まれた道が続き、集落に残る歴史的な建物と相まって旧街道の雰囲気をよく伝えている。

また、旧街道は定期的に地元の人たちにより手入れされているため、道が荒れて通行できない、という事態には殆どならない。高井から黒岩にかけては道づくり等の習慣も継続されており、活動の背景に伊勢本街道沿線に暮らす人々の、道行く人への思いやりが感じられる。



宇陀市内における伊勢本街道の旧宿場町および道標等の分布図



萩原



高井



諸木野



石割峠への道



田口



黒岩

(2) 建造物

【船尾垣内の道標】

石造、板碑型の道標。文字が風化して読み取りにくい
が、拓本により「右いせみち 寛文四年（1664）
梵字（阿弥陀三尊）奉供養回国 同行十二人 左やまみち
十月十五日」と刻銘されていることがわかる。いつも
花が供えられ、地元で大切にされている。現在も伊勢本
街道の名残を伝え、伊勢への道を示している。伊勢本街
道沿いには、年代不詳のものも含めてこうした道標がい
くつも残っている。



船尾垣内の道標

【松本家住宅】

木造つし二階建、切妻造庇付。伊勢本街道に面して
建つ家で、『伊勢本街道 - 奈良県「歴史の道」調査報告書
- 』（昭和 60 年（1985）3 月/奈良県教育委員会）による
と、18 世紀後半頃と推定され、幕末頃まで旅籠を営んで
いた。道づくりの際には、作業にあたる人たちの休憩場所を
提供している。杉林の間からは、高井の集落を見下ろす
ことができ、道路向かいの小さなスペースに椅子を置き
道行く人が腰を下ろしてひと息つけるようにしている。



松本家住宅

【飯岡家住宅主屋】国の登録有形文化財

木造平屋建、茅葺一部瓦葺、片側入母屋造。田口の集
落の東側にある民家で、旅籠もしていた。建築年代は不
明だが、江戸時代後期のものと推測されている。

主屋は敷地中央に建つ、桁行 19m 梁間 11m の大型民家。
屋根は南北棟の茅葺きで、南面は高塀造、北面は入母屋造。南側に土間を設ける
二列三室をとる六間取りで、座敷や仏間、納戸などからなり、カミザシキは上質
なつくりになる。高塀造りの面影を伝える農家。このほか敷地内の内蔵及び米蔵
も登録文化財。



飯岡家住宅

(3) 活動

【旧伊勢本街道の道づくり】

内牧地域まちづくり協議会では、防犯・防災部会の活動の一環で、9月と12月の年2回、毎回場所を変えながら伊勢本街道の道づくりを実施している。12月末に「おかげ参り」の御一行がこの道を通るため、それに間に合うように主に草刈りや倒木・支障木の撤去作業を行い、通行者の安全・安心の確保に取り組んでいる。

道づくりそのものの歴史は古く、『内牧村風俗誌資料』(大正4年(1915)/内牧村)によると青年会の活動として「現時行ヒツツアル事業ノ主ナルモノヲ擧ゲレバ 植林 道路修繕 講演會開催(中略)」とあり、内牧村に所属する17歳~30歳までの青年が担っていた作業を、内牧地域まちづくり協議会が継承している。



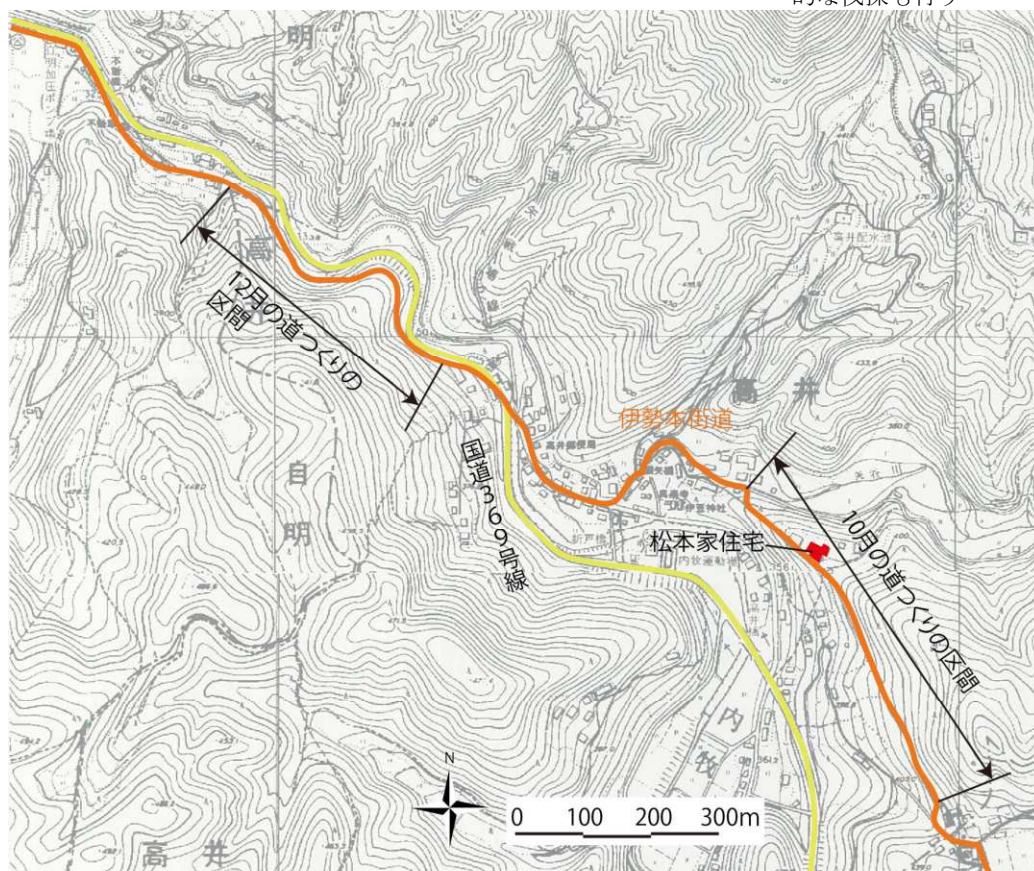
松本家前を東へ



支障木の撤去や草刈りをする



12月の道づくりでは本格的な伐採も行う



伊勢本街道の道づくり区間(令和3年度(2021)実施分)

【伊勢迄歩講】

昭和 38 年（1963）、ユースホステル運動²⁴の一環として大阪ユースホステル協会が『みんな歩こう』運動」を提唱し、歩くことを通しての「学び」や「体験」「健康づくり」を大切にした活動を展開していた。こうした背景の中、昭和 46 年（1971）に昔の旅人が辿った旧伊勢本街道を可能な限り忠実に辿り、自然・歴史・文化に触れながらみんなで協力しながら歩く楽しさを体感することを目的として「伊勢迄歩講」が始まった（平成 2 年（1990）12 月 18 日付け読売新聞によると「大阪ユースホステル協会主催の年末恒例行事で、今年で 18 回目」とある。）

主催は大阪ユースホステル協会で、参加を希望するユースホステル会員で講を組織し、事務局と学生ボランティアが参加者の完歩を支援する。11 月頃から募集が始まり、12 月上旬に参加者説明会を開催、その際に結団式を行う。

講の一行は 12 月 28 日に大阪の玉造神社を徒歩で出発し、元旦午前 0 時に伊勢神宮の内宮到達を目指す。伊勢本街道をひたすら進む行程で、宇陀市に至るのは 12 月 30 日、あぶらやで休憩を取り、そこで地元の方のお接待を受ける。

翌日は、墨坂神社への参拝から始まり、高井（ここでも松本家でお接待を受ける）、赤埴、諸木野を経由し、石割峠を越えて田口、黒岩へと進む。



松本家で休憩



諸木野関所跡で解説



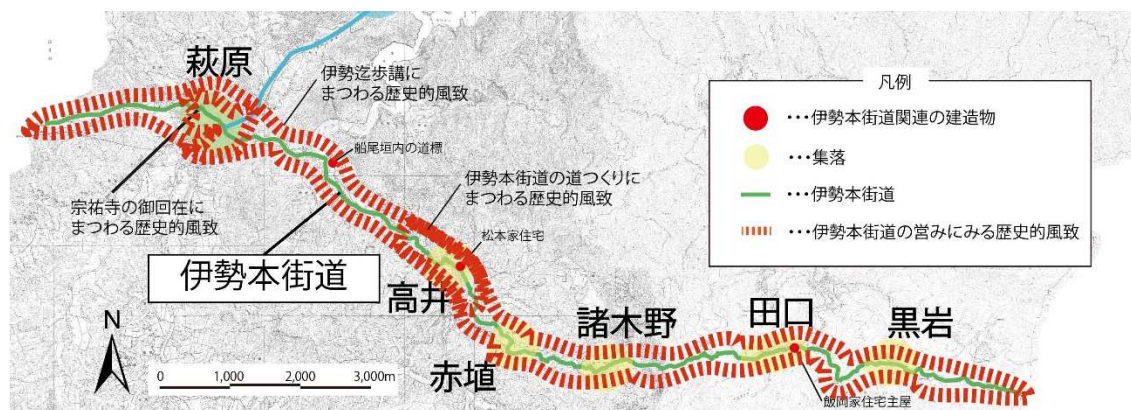
伊勢迄歩講のチラシ

（４）まとめ

大和から伊勢へと続く道の中で、急峻な峠道が多い伊勢本街道。往来する人の増加とともに街道筋に旅籠や商家が増え、参詣者のために道標などが整備された。講を組織して伊勢本街道を通して伊勢神宮へ参拝する活動や、こうした

²⁴ユースホステル運動は、ドイツの小学校教師リヒャルト・シルマン（1874 年生～1961 年没）が提唱した運動で、自力による簡素な野外旅行活動を通じて青少年を健全に育成することを目的とし、青少年の旅に安全かつ安価な宿泊場所を提供しようという趣旨で始まった運動である。それにより生まれた宿泊施設がユースホステルで、この運動は世界約 80 の国と地域に広がっている。

人が通行しやすいように道の草刈り等を行う「道づくり」が当時の面影を残す古道や集落を舞台に続けられているほか、縁台を出して休む場所を提供する、お茶やお菓子のお接待を行う、などの「おもてなし」もあちこちで見ることができる。見知らぬ他人を思いやり、迎え入れる活動が歴史的環境と相まって、良好な歴史的风致を形成している。



2-3 あお越え道沿いの集落の 営みにみる歴史的風致

(1) はじめに

萩原の分岐点から北東へ分岐した道は、額井岳南方の山麓沿いに福地・長峯・山辺三・大野・三本松を通して名張・青山へと抜ける。萩原の札の辻に建つ道標（文政十一年建立）北面に「左あをこ江みち」と刻まれているが、「あお越え道」「伊勢表街道」「初瀬街道（伊勢から大和へ向かう場合の呼称）」とも呼ばれた道である。萩原から、福地、長峯、山辺三、大野、三本松と沿線に集落が発達している。

伊勢本街道に比べて山道が緩く少ないので、女性や子供が歩きやすい道として認識されており、参宮層の広まった近世末から利用者が本街道を上回るようになった。参宮急行本線の開通や自動車交通の普及に伴う道路整備の推進と相まって、近世の旧道は大部分が消滅・形状変更しているが、ところどころに往時の面影を読み取ることができる場所が残っている。

例えば、長峯にある観音寺へ案内する石の道標や、山部赤人の墓への分岐点にある石の道標、伊勢街道沿いに佇む濡れ地蔵が残り、遠方から訪れる旅人に対する近隣の観光名所の道先案内を行っていた痕跡があるほか、町内安全と旅の安全を願う行事として、地蔵会式が現在も続いている。



あお越え道のルートと集落の分布

(2) 建造物

【濡れ地蔵】

石造、磨崖仏。巨岩の表面を船形に掘りくぼめ、地蔵菩薩立像が彫られている。後背部右側に「建長六年甲寅八月十五日建」と陰刻されている。もとは背後の山から滲み出る水の影響で常に濡れていたことから、濡れ地蔵と呼ばれるようになったと伝わる。

旧伊勢街道沿線にあるため、この場所を通過する伊勢参りの旅人たちもこの地蔵を拝んでいたと推察でき、地蔵の周囲には宿屋が並び、「地蔵前」と呼ばれて賑わっていた。

現在は室生ダムの西端に位置するため、周囲に建物はなく、冬から春にかけては水中に沈んでいる。

秋の彼岸に、山辺三の集落で地蔵会式が執り行われている。



濡れ地蔵の前に伊勢街道が通っていた



後背部右側に刻銘がある

【大野宿の常夜灯】

石造。大野宿は、萩原から分岐し、山辺の次の宿場町である。旧街道に面して建てられ、常夜灯の竿石の正面に「村内安全」「両宮大神宮」、背面に「安永六年（1777）」と刻まれている。

入母屋の笠で宝珠がないのが特徴である。



大野宿の常夜灯

【三本松の常夜灯】

石造。三本松は、大野宿の次の宿場町にあたる。現在も旧旅籠の建物が点在し、往時の雰囲気を感じることができる。常夜灯は、旧道から少し離れた広場に安置されている。常夜灯の竿石側面に「嘉永三年（1850）庚戌二月建立」と刻まれている。かつては街道沿いに建てられたが、戦前、地震の際に倒れたことから現在の場所へ移されたと伝わる。

宿場町として栄えていたころは、灯明の油は周辺の宿屋で分担した。現在は灯明をともしていないが、道づくり（集落の共同作業で行う道路の草刈り・清掃等）の際に手入れをしている。



三本松の常夜灯

(3) 活動

【濡れ地蔵の供養】

毎年、秋のお彼岸に濡れ地蔵会式が行われている。山辺三自治会が主催し、町内の安全と道行く旅人の安全を祈願し、山辺三に所在する西方寺住職の読経の中、参列者全員による焼香が行われたあと、車座になって鉦を鳴らしながら大きな数珠を全員で回す「数珠繰り」が行われる。数珠繰りに使った数珠で背中を撫でてもらうと、健康長寿の御利益があるといわれる。会式ではお供えを持ち寄り、数珠繰りが終わったあとで世帯ごとに分配して持ち帰る。

現在の濡れ地蔵前は、ダムの底に沈むため周囲に何もない状況であるが、室生ダムが建設される前から続いている法要である。昭和44年(1969)5月26日付け大和タイムスによると、「毎年8月24日には地元の人たちが供養を続けてきた」とあり、このころには法要が行われていたことがわかる。



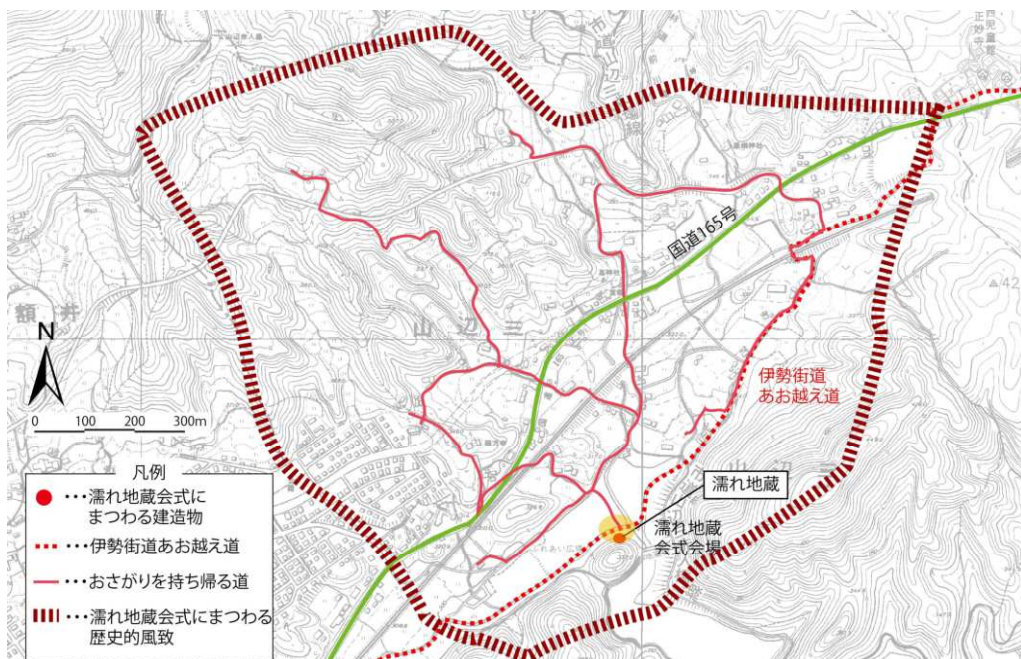
数珠繰りの様子



背中を撫でる



数珠を納める箱の蓋の裏



濡れ地蔵会式にまつわる歴史的風致

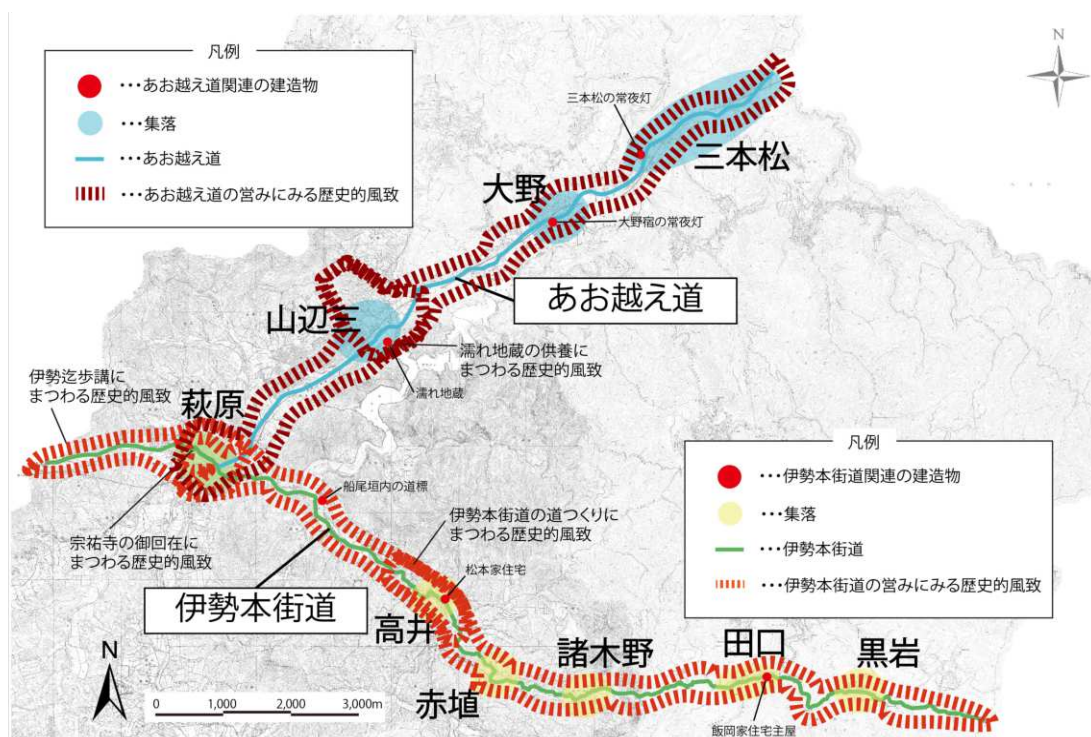
(4) まとめ

あお越え道（表伊勢街道）は、伊勢本街道に比べてなだらかな道が多いことから利用者が増え、近世末には伊勢本街道を凌ぐ通行量であった。利便性の高さから、鉄道が通り国道が整備され、その面影を残すところは限られている。町家群や石造物などの歴史的環境を舞台に、道行く人々の旅の無事を祈る行事が相まって、良好な歴史的風致を形成している。

おわりに

奈良盆地から伊勢へと通じる重要な街道として発達した伊勢街道は、宇陀市榛原萩原で距離が短く険しい伊勢本街道と、比較的なだらかで歩きやすいあお越え道に分岐する。街道沿いの旧宿場町は、集落ごとに往時の面影を残しており、道標や常夜灯は現在も伊勢への道を示している。

江戸時代の人々の追体験として続く徒歩での参詣と、参詣客をもてなすための道の整備や道中の安全への祈りを込めた行事が、伊勢街道沿線に残る歴史的環境を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的風致を形成している。



伊勢街道の旧宿場町にみる歴史的風致